

健康生きがい権の確立を目指して

健康生きがい開発財団理事長
辻 哲夫

本日のお話のあらまし

- I、「健康生きがい」の概念が重要となっている背景について
- II、「健康生きがい」という新しい概念について
- III、「健康生きがい権」の確立を目指す意義について

1、「健康生きがい」の概念が重要となっている背景について

(1) 日本は未知の社会に向かっている。

・社会の超高齢化と人口減少【図1】

⇒高齢者は、支える側に回る必要性

➔維持できる限りの就労を含めて健康寿命が大切

(2) 人生100年の時代を迎えようとしている。

・個人の長寿化【図2、3】

⇒誰もが虚弱になる可能性

➔弱っても終わりではない生き方が大切

(3) 戦後生まれの高齢者（団塊の世代以降）の生き方が問われている。

⇒現行の憲法の下で育った初めての高齢者世代

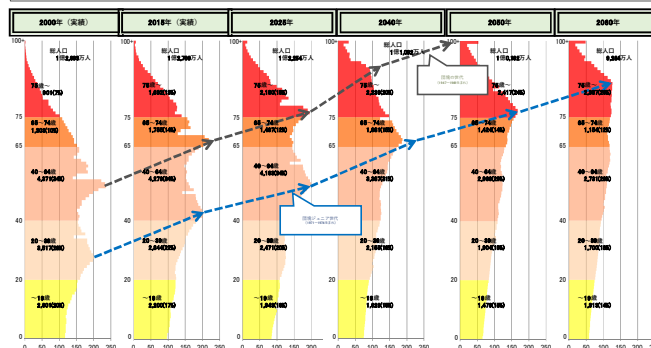
➔個人の尊重ときめ細かな社会システム（地域包括ケアシステム）が大切（注1）

【図4-1, 2】

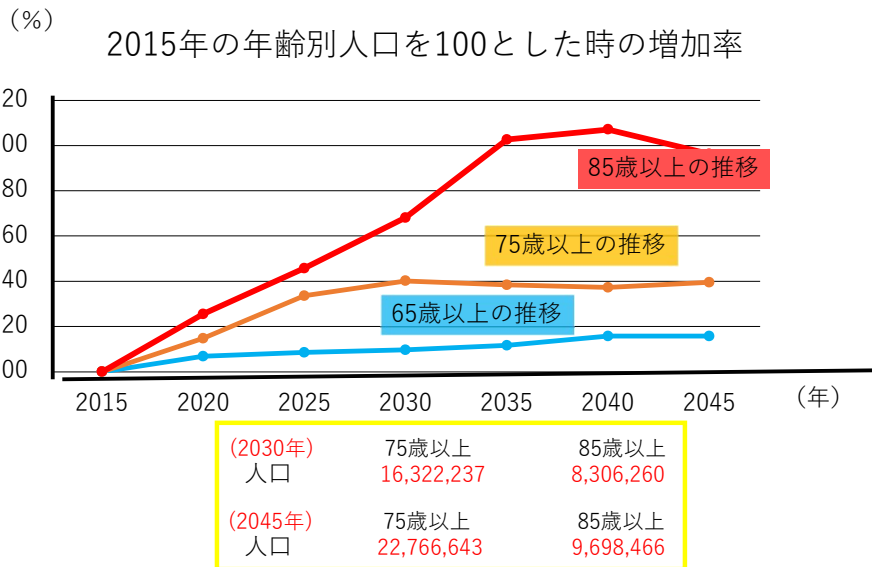
（注1）憲法13条「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に関する国民の権利については、【中略】国政の上で、最大の尊重を要する」。

【図1】 超高齢・人口減少の見通し

- 65歳以上人口の割合は、現在世界一で、2040年には約35%。人口は減少。
- 2040年に向けて、85歳以上人口は歴史上のピークに達し、85歳以上人口は100万人に達する。高齢者世帯は、一人暮らしと夫婦世帯が中心。



【図2】日本の高齢化の推移

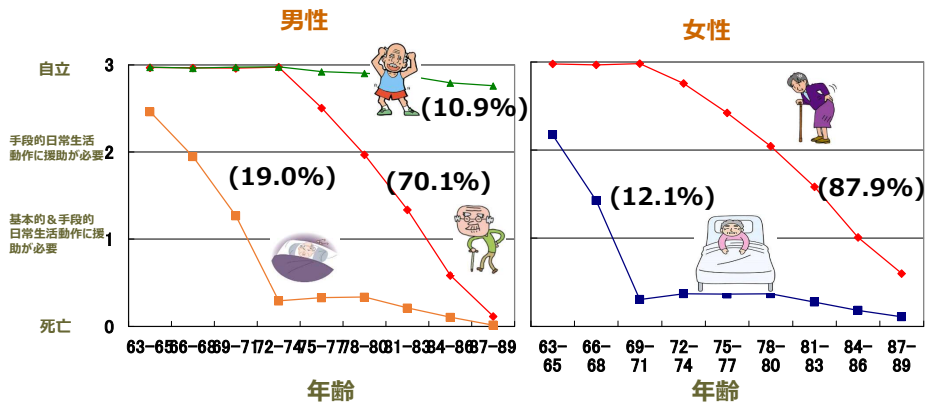


出典 国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口』（平成30（2018）年推計）から作成
将来の地域別男女5歳階級別人口（各年10月1日時点の推計人口：2015年は国勢調査による実績値）

5

【図3】日本の高齢者の自立度（多様なパターン）

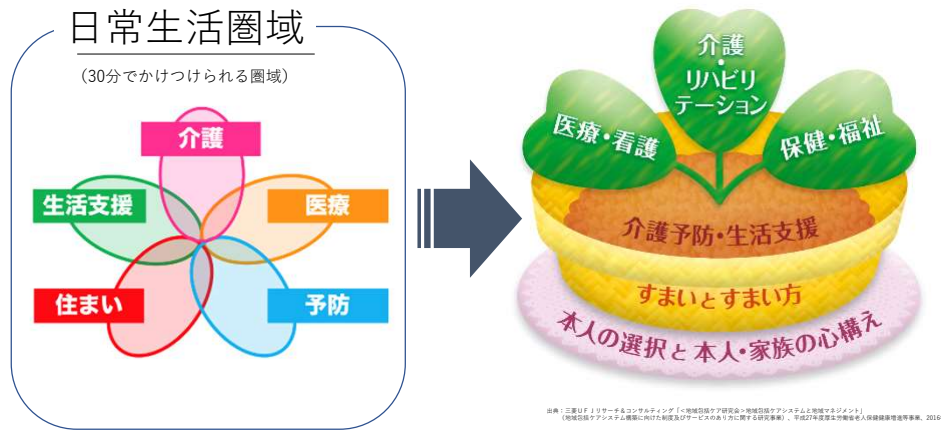
— 全国高齢者20年の追跡調査 —



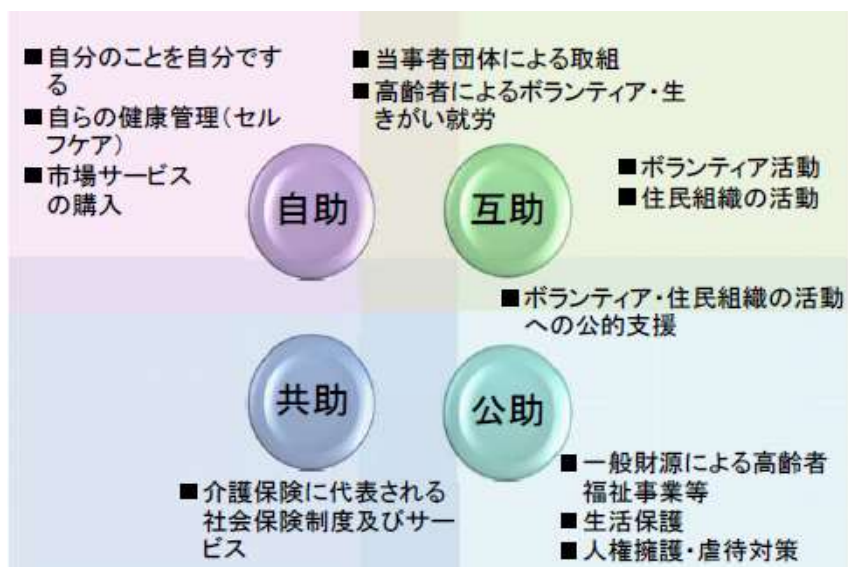
出典 秋山弘子 長寿時代の科学と社会の構想 『科学』 岩波書店, 2010

6

【図 4 - 1】 地域包括ケアシステム：個人の尊重ときめ細かな社会システム



【図 4 - 2】 自助、互助、共助、公助の概念



II、「健康生きがい」という新しい概念について

(1) 高齢期の生き方で大切な究極のこと（その1）－健康とその概念の変容

- ①WHOの定義：肉体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病又は虚弱の存在しないことではない（WHO）。
 - ②ICF（国際生活機能分類）の概念の登場：参加（社会活動参加、家庭や地域での役割など）という積極的な概念の重要性【図5】
 - ③治し支える医療の評価指標としてのQOLの確保の考え方：生命の確保（生理的健康）の確保に生活の充実（生きがい）、人生の満足（生きがい）が加わる。
- 個人の長寿化等に伴い慢性期の疾患を持ち虚弱な状態となることが誰にも起こりうることとなり、健康の概念は変容しつつある。

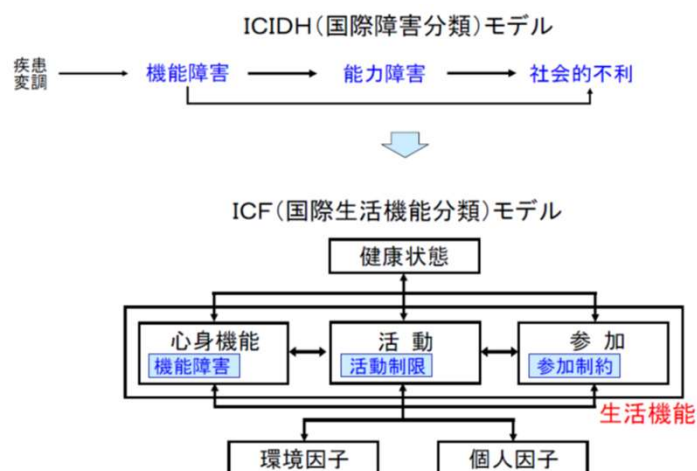
(2) 高齢期の生き方で大切な究極のこと（その2）－生きがいの概念とその深化

- ①神谷美恵子氏の考え方：「いきいきしたよろこびという素朴な感情」と「誰か、あるいは何かに認められるはりあい」
 - ②「生きがいについての研究会」（注2）報告書考え方：「一人称」→「二人称」→「三人称」への循環構造を持った生きがい（注2）老人福祉法第2条（1989年改正）「老人は、（中略）生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする」
- 自らの主体的な生きがい（自分自身の喜び）＋社会（高齢期は通常自らが住む人地域社会）との関わりの下での（三人称の）生きがい一つの到達点ともいえ、それが、高齢期において実現されることが望ましいといえるのではないか。

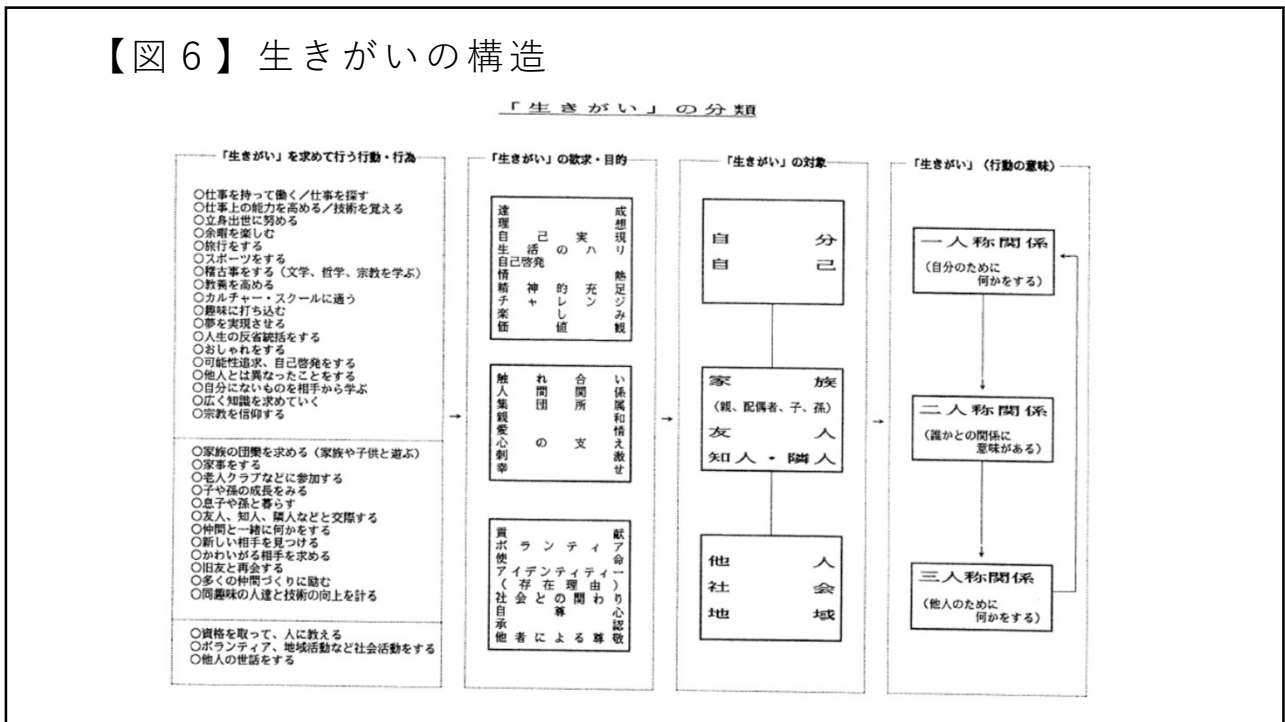
(3) 高齢期の生き方で大切な究極のこと（総括）－「健康生きがい」という新しい概念

- ①人生100年の時代における健康と生きがいは重複するとともに一体のものであり、従来の健康の概念を超えた新しい概念として「健康生きがい」という概念の確立が必要である。
- ②究極の生きがいは、自らと他者とが尊厳を認め合うということの中において存在するといえる【図7】。

【図5】ICFの概念の登場



【図6】 生きがいの構造



【図7】 「人間の尊厳」「幸福」ということ

糸賀一雄先生の言葉(著書「福祉の思想」より)

- おしめを毎日取り換えられている一人の重症の青年が、ある日、カんで、カんで、一所懸命腰を持ち上げていた。その力が電気のように手に伝わって保母はハツとした。丸太のように寝ているだけだと思っていたのにそうでなかったのだ。伝わってくるその響きに生命というものを感じさせられたのだ。その喜びと驚き。これこそ自己実現、自己実現の姿なのだ。これが生産でなくて何が生産なのか。
- すべての人間は生まれたときから社会的存在なのだから、それが生き続けている限り力いっぱい命を开花していくのである。
- 「この子らに世の光を」当ててやろうという憐みの政策を求めているのではなく、この子らが輝く素材そのものであるから、いよいよ磨きをかけて輝かそうというのである。「この子らを世の光に」である。

佐藤智先生の言葉(著書「在宅老人に学ぶ」より)

- 老人は、最後の時まで生き続ける者であり、個性的なものである。
- 老人は、無限の可能性をもつ。
- 老人は、主人公である。

神野直彦先生のお考え(2021.9.1講演資料より)

- 自己の存在が、他者にとって必要不可欠な存在であると実感できた時に、人間は幸福や生き甲斐を実感する。
- 幸福を追求する社会では、他者の悲しみを分かち合う権利が制度として保障される必要がある。

Ⅲ、「健康生きがい権」の確立を目指す意義について

(1) 「健康生きがい」の姿は多様であり、多面的に考察する必要がある。

- ① 「健康生きがい」の実現のためには、「フレイル予防」「在宅医療」「共生社会」「ロボット、AI」「学習」といった多面的なテーマの中で、「健康生きがい」がどのように獲得されるかを具体的に考察する必要がある。
- ② 「健康生きがい」の実現のために、地域社会において、高齢者自身の主体的な活動と助け合いの活動（自助互助の営み）を行うとともに、きめ細かな公的な支援システム（共助公助の営み）の展開が必要となっている。

(2) 「健康生きがい権」という概念を設定することが、課題解決に繋がる。

- ① 私たち市民が高齢期の「健康生きがい権とは何かということ」を多面的に考究することを通して、
- ② 「現在の私たち自身と地域社会にある課題を皆で共有すること」が、
- ③ 「今後の私たち高齢者のありたい生き方とあるべき社会システム」を実現することに繋がるのではないか。